様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34316
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520059
研究課題名（和文）　ディグナーガ論理学の再構築

研究課題名（英文）　Reconstructing Dignāga's System of Logic

研究代表者
桂　紹隆（KATSURA SHORYU）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：50097903

研究成果の概要（和文）：ジネーンドラブッディの『集量論複注』第三章後半部分の梵語テキストの批判的校訂本の作成、ディグナーガの『集量論』およびその『自注』の該当部分の梵語テキストの復元、これら三テキストの英訳と和訳の作成を完成した。第四章については、三テキストの校訂／復元と和訳の第一段階が完了している。これらの成果にもとづいて、多くの学会発表、学術論文の公表が行われた。ディグナーガの論理学の体系的記述も試みた。

研究成果の概要（英文）：The three-years project produced (1) Critical and Diplomatic Editions of the last half of the third chapter of Jinendrabuddhi' sPramāṇasamuccayaṭīkā, (2) Sanskrit Reconstruction of the same portion of Dingāga' sPramāṇasamuccaya and its Svavṛtti, (3) English and Japanese translations of the above three texts, and (4) Trial version of Critical Edition of Pramāṇasamuccayaṭīkā and Sanskrit Reconstruction of Pramāṇasamuccaya-svavṛtti chapter 4 together with Trial Japanese translation. A team of scholars who joined this project presented and published many academic papers based on the above results, including a systematic presentation of Dignāga' s logic.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学
キーワード：仏教論理学、論証、ディグナーガ、ジネーンドラブッディ、集量論自注、集量論複注、論軌、インド哲学諸派

１．研究開始当初の背景

インド論理学史においてターニングポイントとなる新理論を提示した仏教論理学者、ディグナーガ（約 480〜530）の研究は、その著作のほぼすべての梵語原典が散逸している

ため、漢訳やチベット語訳によって進められて来た。宇井伯寿、トゥッチ、北川秀則、服部正明などの優れた業績は、すべてそのような制約の下で生み出されたものである。

この状況を一変させたのは、ディグナーガの主著『プラマーナ・サムッチャヤ（集量論）自注』に対するジネーンドラブッディの『複注』の梵語写本がチベットの僧院で発見されたことであった。ウィーン大学／オーストリア科学アカデミーのエルンスト・シュタインケルナー教授は、北京の中国蔵学研究中心の協力のもとに、いち早くその写本の写真を入手して、『集量論複注』の写本の解読と校訂を試みて来た。その成果は、同書第一章の Diplomatic Edition（転写本）と Critical Edition（批判的校訂本）の出版(2005)として結実している。また、それにもとづく『集量論』第一章の復元梵語テキストがネット上に公開されている。さらに、第二章に関しても既に校訂作業は終了し、遅くとも本年中には出版される予定である。

研究代表者は、シュタインケルナー教授より、『集量論複注』全六章のうち第三章、第四章、第六章の批判的校訂本の作成を依頼されている。オーストリア科学アカデミーのチームは、ヘルムート・クラッサー博士を中心に同書第五章の校訂作業を開始している。

本プロジェクトに先行する、科学研究費補助金による研究において、既に第三章前半の校訂を終了している。従って、本研究は、第三章の後半部分、さらには第四章の校訂を目指すものであった。

２．研究の目的

本研究の目的は、『集量論複注』第三章後半部分と第四章の校訂作業を行い、その結果として得られる、当該部分の『集量論』およびその『自注』の梵語テキストの復元を試みることであった。さらに、これらの文献学的成果にもとづいてディグナーガ論理学の体系的な記述を提示することが最終的な目的であった。

３．研究の方法

上の目的を達成するために次のような方法をとった。

(1) 『集量論複注』の梵語写本の写真版及び試みの転写はオーストリア科学アカデミーから提供された。同書のチベット語訳テキストは Asia Classic Input Project から入手可能。
(2) まず、研究協力者の岡崎康浩博士が、これらの資料にさらに『集量論自注』のチベット語訳テキストを加え、複数のチベット語訳が存在する場合は、それらを校合し、転写本を写本の写真と照合した上で、『集量論自注』のチベット語訳の校訂テキストと復元梵語テキスト、『集量論複注』の梵語・チベット語訳の校訂テキスト、さらに両テキストの現代日本語訳を準備する。
(3) その成果をオーストリア科学アカデミーの研究員である研究協力者の渡辺和俊博士が検討し、必要な修正と独自の和訳を加えた、新バージョンを作成する。
(4) 毎月二回、長期休暇中には集中的に開催する検討会に、サンスクリット写本研究の第一人者である京都大学准教授のディワーカル・アーチャーリヤ博士や、神戸女子大学の狩野恭教授、京都産業大学の志賀浄邦講師、京都大学白眉プロジェクトの志田泰盛助教などが集まり、岡崎・渡辺両氏の成果を検討し、最終的な

校訂テキストと英訳を作成する。

(5) Critical Edition は研究代表者の桂、Diplomatic Edition は筑波大学の小野准教授が最終的な整理を行う。

４．研究成果

この三年間で、『集量論複注』第三章（の後半部分、すなわち「他者の為の推理」すなわち、論証を構成する三要素（主張命題、証因、喩例）のうち「証因（理由）」と「疑似証因」に関する、仏教徒の世親（Vasubandhu 五世紀）に帰せられる『ヴァーダ・ヴィディ』（論軌）、仏教以外のニヤーヤ学派、ヴァイシェーシカ学派、サーンキヤ学派の諸説を取り上げ、徹底的にディグナーガが批判する箇所の批判的校訂を完了した。論証を構成する第三の要素「喩例」と「疑似喩例」については、岡崎氏が既に試みの批判的校訂テキストを作成し終えている。

第四章、第六章については、平成 24 年度から始まる新しい科学研究費補助金による研究プロジェクに引き継ぎ、完成させる予定である。

具体的な研究成果としては、『集量論複注』の当該箇所の批判的校訂本と和訳・英訳を完成し、『集量論』および『集量論自注』の梵語テキストの復元と和訳・英訳を完成したことである。『集量論複注』の Critical Edition と Diplomatic Edition は、同書の他の章と同様に北京の中国蔵学研究中心から出版されることになる。『集量論』および『集量論自注』の復元梵語テキストは、第一章と同様にネット上での公開を考えている。和訳・英訳に関しては、目下のところ公開を考えてはいない。

研究グループの公表した成果を次にあげておくが、一緒に読んだテキストを利用して各自が多数の研究発表を行い、研究論文を公刊している。ディグナーガの論理学の体系的な記述については、研究代表者の「仏教論理学の構造とその意義」（論文 No. 16）に纏められている。

今回のプロジェクトの成果として、今まで未知であった世親やインド哲学各派の論理学テキストの断片が多く回収されたことである。特に、サーンキヤ学派の『六十科論』の断片が多く発見され、サーンキヤ学派の論理学の歴史的考察に資するところ大である。

本プロジェクトの成果は、今年８月北京の蔵学研究中心で開催される国際学会で研究代表者が発表する。研究分担者や研究協力者も今年の様々な学会でその成果を公表する予定である。

本プロジェクトでなし得なかったことは、既に始まっている新しい研究プロジェクトで完遂するつもりである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 18 件）

①桂紹隆「仏教論理学の構造とその意義」『シリーズ大乗仏教９認識論と論理学』，春秋社（査読無）2012, pp.4-48.

②小野基「真理論－プラマーナとは何か」『シリーズ大乗仏教　９　認識論と論理学』春秋社（査読無）2012, pp.155-188.

③小野基「インド仏教論理学における parārthānumāna の概念の変遷―その起源をめぐって―」『印度学仏教学研究』（査読有）第 60 巻第 2 号、2012 年、pp.(113)-(118)

④小野基「Pramāṇavārttikālaṃkāra, Parārthānumāna章の研究－校訂テクストと和訳・訳注（７）」、『哲学・思想論集』第36

号、筑波大学人文社会科学研究科哲学・思想専攻、(査読有)2011年, pp.41-69.

⑤桂紹隆, “A Report on the Study of Sanskrit Manuscript of the Pramāṇa-samuccayaṭīkā Chapter 3”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*(査読有) Vol. 59, No. 3, 2011, pp. 163-170,

⑥志賀浄邦・志田泰盛「Yuktidīpikā 87,18-91,17 (ad SK 6ab) 和訳と注解」『インド学チベット学研究』(査読有) 第15号、2011年、pp. 1-34

⑦志賀浄邦, “Remarks on the Origin of All-Inclusive Pervasion”, *Journal of Indian Philosophy*(査読有) Vol. 39, 2011, pp. 521-534.

⑧渡辺俊和, “Dharmakīrti's criticism of *anityatva* in the Sāṅkhya theory”, *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 39 4-5, 2011, pp.553-569

⑨桂紹隆, “From Abhidharma to Dharmakīrti --- with a special reference to the concept of svabhāva”, Helmut Krasser et al, ed., *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis*, *Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference, Vienna, August 23-27, 2005.* Verlag der OesterreichischenAkademie der Wissenschaften (査読有) 2011, pp. 271-279

⑩志賀浄邦, “antarvyāpti and bahirvyāpti re-examined”, Helmut Krasser et al, ed., *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis,*(査読有), 2011, pp. 423-435

⑪渡辺俊和, “Dharmakīrti's interpretation of *Pramāṇasamuccaya* III 12”, *Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis*. (査読有)2011, pp.459-467

⑫桂紹隆 “Apoha Theory as an Approach to Understanding Human Cognition”, Siderits, Tillemans, &Chakravarti, ed., *Apoha, Buddhist Nominalism and Human Cognition,* Columbia University Press (査読無), 2011, pp. 125-133.

⑬桂紹隆「インドにおける討論の伝統とその形式的発展」マルティン・レップ／井上善幸編、『問答と論争の仏教　宗教的コミュニケーションの射程』、法蔵館 (査読無) 2011, pp.5-19.

⑭桂紹隆 「インド仏教思想史における大乗仏教―無と有との対話」『シリーズ大乗仏教 1 大乗仏教とは何か』春秋社(査読無)2011, pp.253-288.

⑮桂紹隆, “RedsicoveringDignāga through Jinendrabuddhi”, Ernst Steinkellner, Daun Qing, Helmut Krasser (eds.), *Sanskrit manuscripts in China, Proceedings of a panel at the 2008 Beijing seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*, (査読無) 2010, Peking, pp. 153-166.

⑯志賀浄邦, Tattvasaṃgraha 及び Tattvasaṃgrahapañjikā 第18章「推理の考察(Anumānaparīkṣā)」和訳と訳注(3),『インド学チベット学研究』, 第 13 号, (査読有)2009, pp. 98-140.

⑰渡辺俊和, Dharmakīrti on False Rejoinders (*jāti*), 『印度学仏教学研究』第58巻3号、(査読有)2010、pp.1235-1240

⑱小野基「相違決定(viruddhāvyabhicārin)をめぐって」、『インド論理学研究』松本史朗教授還暦記念創刊号、駒澤大学、(査読無) 2010年、pp.125-143.

〔学会発表〕(計 11 件)

①渡辺俊和：Dharmakīrti on *pratijñārthaikadeśa,* 15th World Sanskrit Conference, 2012年1月7日、New Delhi
②小野基「インド仏教論理学における parārthānumānaの概念の変遷―その起源をめぐって―」、日本印度学仏教学会第62回学術大会、龍谷大学、2011年9月7日
③桂紹隆， Dignāga on Non-Buddhist Theories of Proof, The XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2011 年 6 月 23 日、Dharma Drum Buddhist College Jinshan, New Taipei City, Taiwan.
④桂紹隆， Indian Logic and Metaphysics Found in Kuiji’s Cheng weishilunshuji（成唯識論述記）- A Preliminary Report on His Knowledge of the Sāṃ khya System, The XVIth Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2011 年 6 月 21 日, Dharma Drum Buddhist College Jinshan, New Taipei City, Taiwan.
⑤渡辺俊和, How can the existence of the Sāṅkhya’s*pradhāna* be negated?: Dignāga’s view of refutation (*dūṣaṇa*), 16th Congress of the International Association of Buddhist Studies, 2011年6月21日Dharma Drum Buddhist College, Taiwan
⑥桂紹隆,*Kui-ji’s Records of the Vaiśeṣika Doctrine,* Indian Buddhist Thought in 6th-7th Century China International Workshop, 2011 年 6 月 19 日、国立政治大学（台北）
⑦桂紹隆，『集量論複注』第３章写本研究報告―ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ批判―，日本印度学仏教学会， 2010年９月10日、立正大学
⑧桂紹隆, Indian Logic and Metaphysics Found in Kuiji’s*Cheng weishilunshuji*（成唯識論述記）-- A Preliminary Report on His Knowledge of the Sāṃkhya System, 2010年3月27日，国立政治大学（台北）
⑨渡辺俊和，ダルマキールティにおける〈誤った論難〉（*jāti*）について，日本印度学仏教学会，2009 年 9 月 8 日、大谷大学
⑩志賀浄邦, Some remarks on the origin of all-inclusive pervasion, 第 14 回国際サンスクリット学会, 2009 年 9 月 4 日，京都大学
11 渡辺俊和, Dharmakīrti’s criticism of *anityatva* in the Sāṅkhya theory, 第 14 回国際サンスクリット学会，2009 年 9 月 4 日，京都大学

６．研究組織

(1)研究代表者

桂　紹隆（KATSURA SHORYU）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：500979903

(2)研究分担者

小野　基（ONO MOTOI）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：00272120
志賀　浄邦（SHIGA KIYOKUNI）
京都産業大学・文化学部・講師
研究者番号：60440872

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：

研究協力者

岡崎　康浩(OKAZAKI YASUHIRO)
広島県立三次青陵高等学校教諭

渡辺　俊和(WATANABE TOSHIKAZU)
オーストリア科学アカデミー・アジア文化・思想史研究所研究員

DiwakarAcharya
京都大学大学院文学研究科准教授

狩野　恭 (KANO KYO)
神戸女子大学教授

志田　泰盛(SHIDA TAISEI)
京都大学白眉センター特定助教